

苦痛を和らげる薬を貰いながら死にたい

日本でも早く安楽死法を 通してもらおうしかない

「安楽死で逝きたい」。橋田壽賀子氏が文藝春秋（16年12月号）で公言して以降、「尊厳ある死」を巡る議論が喧しい。今年83歳を迎える作家はどう考えるか。

*

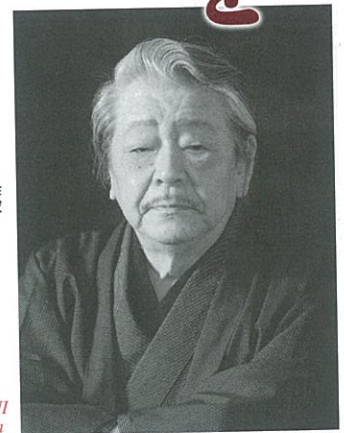
認知症になって家族に迷惑をかけ長く生きるよりは早く死んだ方がいいと望む人は多い筈だ。そして同じ死ぬなら苦痛のない方法でも望むだろう。そんなことを考える人は当然まだ認知症になっていない。頭のはつきりしている老人が安楽死を求めてもその家族の多くは反対するだろうし、そもそも安楽死は法的に認められていない。つまり病院では安楽死をさせてくれない。これを自分でやろうとすると安楽死ではなく自殺ということになってしまう。法的には有罪だ。これだと原則、家族に生命保険

死に方

がおりないのである。まあ、死んでしまえばあとのことはどうでもいいようなものだが、やはり家族が困るようでは可哀想だ。

では、事故死または他殺と見せかけて自殺するといふのはどうであろう。誰でも考えることであり、これをメイントリックにしたミステリーはいっぱいある。それに生命保険会社は自殺なのに保険金を取られては損をするから、懸命になって自殺であることを証明しようとする。だから当然のことながらこのトリックは先刻ご承知、あらゆるミステリーのトリックを調べ盡している。残念ながら素人考えで成立つようなトリックはすぐに見破られてしまうのである。

最近、老人の運転する車



作家
筒井康隆

TSUTSUI
Yasutaka

共同通信社

の事故が多発しているが、わざと車で大事故を起して自分も死ぬというのは甚だ迷惑な死にかただ。家族も責められることになり、下手をすれば何人も巻添えにして自分だけ助かったりする。これはもう目も当てられない結果となるからやめた方がよからう。

ならば自殺する気で第三者から殺されるという手段はどうであろうか。どう見てもアブナイ奴に喧嘩を売るといふ方法である。相手はやくざかチンピラであり、罰せられて当然の輩だ。だがこれにも難点が二つある。一はこちらも最小限の労力を要する上、さらには相当な苦痛を伴うことである。要するに安楽死にはならない。二は、この方法だと尊厳死とも言えない。本人と

しては悪い奴をやっつけようとして殺されたという偉そうな言い訳が成立し、尊厳死を主張できる筈と思っ

ていても、無法者と喧嘩して殺されるといふのは常識としては馬鹿げた振舞いであって世間的にも聞こえが悪い上、警察沙汰になるから家族にとっても迷惑である。

う言い逃れもできる。しかし果たして日本の生命保険会社がこれを認めるかどうか。

こうなれば日本でも早く安楽死法案を通してもらうしかない。日本でなんとか認められているのは一種の尊厳死で、これは自然死とも言われていて医者が延命装置を断ったり点滴の針を抜いたり薬を服ませなかったりして延命治療を行わないことである。治療を絶つことによる苦痛が伴うから安楽死ではない。やれやれやはり苦痛なしに死ぬといふのは日本では至難の業であるらしい。おれにとつての楽しみといえば、まだ未体験のモルヒネを打つてもらうくらいのものか。こうなれば次のように嘯いて自分を宥めるしかあるまいね。「せつかく生きて来たんだから、死の苦痛というものを味わわずに死ぬのは損だ」

だって昔は医者もあまりおらず、たいいていの人は自分の家でもがき苦しんで死んだんだもん。それに比べれば苦痛を和らげる薬を貰いながら死ぬ方がずっとましというものであろう。